

雅歌2章1-4節 「愛の旗印」

1A 愛の保証

2A 茨の中のゆり 1-2

3A 自分を満たす方 3

1B 実を結ばない林

2B 陰になってくださる方

3B 味わう喜び

4A 宴の家にある愛の旗 4

1B 自分に与えられた席

2B 真実を知る神の愛

3B 自分の中に作る律法

本文

私たちの聖書通読の学びは、雅歌に入ります。ソロモンによる三つ目の書物に入ります。箴言、伝道者の書、そして雅歌です。午後礼拝で1章から4章までを読みたいと思いますが、今朝は、2章1-4節に注目したいと思います。「1 私はシャロンのサフラン、谷のゆりの花。2 わが愛する者が娘たちの間にいるのは、いばらの中のゆりの花のようだ。3 私の愛する方が若者たちの間におられるのは、林の木の中のりんごの木のように。私はその陰にすわりたいと切に望みました。その実は私の口に甘いのです。4 あの方は私を酒宴の席に伴われました。私の上に翻るあの方の旗じるしは愛でした。」

ソロモン王は、多才な人でした。知恵を主から与えられ、それで格言を三千も語りました。けれども、晩年に主の愛から離れてしまった人でした。それで、伝道者の書には日の下に起こることは空しいという言葉を残しています。ソロモンが、もう一つ知られていることがあります。女です。箴言の中にも、また伝道者の書にも、女についての教えが数多くありました。彼は、数多くの妻、実に三百人の妻がいました。そして七百人のそばめがいました。そのために、女たちによって自分が苦しみを受けたことを話しています。若い頃からの妻によって自分を楽しませなさい、という勧めを行なっていました。

それでソロモンは、雅歌を書いています。これは、宮廷に数多くいる女たちの中で、たった一人の「シュラムの女(6:13)」と呼ばれている女をソロモンが愛している歌です。そしてこの女も、ソロモンを愛してやまない、その歌が書かれています。実に雅歌は、この二人が愛し合い、そして結婚し、そして結婚が熟していく、夫婦の愛を豊かな表現によって歌っています。夫婦愛は、神の創造された秩序を支える根本になっています。「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。(創世 2:24)」一心同体というところに、最も親密な関係、性の営みがあることは言

うまでもありません。主が与えておられるその基本に、性の営みを含む親密な交わりがあるということを感じたいと思います。

そして、主は男と女の関係、その婚姻関係の中に、ご自身とご自分の関係を築かれました。イスラエルに対して、主はご自分を夫として描いておられます(エゼキエル 16 章等)。そして、教会について、キリストが花婿であり、教会が花嫁であるとしています(エペソ 6:22-33)。したがって、黙示録の終わりは、「御霊も花嫁も言う。「来てください。」(22:17)」という言葉になっています。花嫁が切実に、花婿なるキリストが戻って来られることを待ち望んでいます。

私たちは伝道者の書で、自分たちはいろいろなことをしているけれども、結局のところ主を恐れること、その命令を守ることなのだとことを学びました。つまり、主との関係、主との交わりこそが全てであります。そしてその交わりとは、神の愛による交わりだということです。ですから、私たちが、ソロモンとシュネムの女にある男女の関係から、主がいかにか私たちが愛しておられるのか、その深い部分を見ていきたいと思います。

1A 愛の保証

ソロモンが愛している女に対して行なっていることは、基本的に愛の保証を与えていることです。彼女が、自分が愛されているのだ、その愛で守られているのだという安心を与えています。女は、宮廷にいる多くの娘たちが色白であったのに対して、色黒であることが気になっていました。しかし、ソロモンは「黒いけれども美しい。(1:5)」と保証します。それは、他の兄たちが自分にぶどう畑を見ているように言いつけたために、いつも野原にいたためだ、と言います。

そして野原にいて、ソロモンを待っているものだから、自分が何か時間を持て余しているふしだらな女に見られるのではないかと不安になっています。それでソロモンは言うのです。「女のなかで最も美しい人よ、あなたがこれを知らないからだ。(1:8)」最も美しいと太鼓判をソロモンは押ししました。そして彼女にはそぐわなかったかもしれない、飾り輪や宝石、首飾りなどを付けて、それで、「ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ。(1:15)」と言います。このように、そのままの彼女が美しいと言いますし、そして着飾ってさらに彼女が美しいと言っています。

他の人々の中に生きていた彼女にとって、そして内側ではびくびくしていた彼女にとって、これほどまでに特別な愛の視線を浴びせることによって、彼女自身がソロモンを愛していくこととなります。「自分の愛する方は、私にとっては、この乳房の間に宿る没薬の袋のようです。(1:13)」と、彼自身が自分の胸の中で恋しくなっています。

自分が愛されていることを知るだけでは不十分です。自分が数ある人々の中で、それでも特別に愛されていることを知るによって、愛されている保証を見つけることができます。私が教会に

通い始めた当初、その教会の人々からどのように見られていたのだろうと、今になって振り返ると思いますが、結構、周りの人々の愛を試していたのではないかと思います。けれども、その宣教師の人が強い言葉でこう言ったのです。「たとえ世界にあなたしかいなくても、神はご自分の御子キリストをこの世に送り、あなたの罪のために死に渡してくださった。」驚きました、大勢いる中で自分ではなく、キリストはこの私を愛しておられるのです。そこで本文をご覧ください。

2A 茨の中のゆり 1-2

1 私はシャロンのサフラン、谷のゆりの花。2 わが愛する者が娘たちの間にいるのは、いばらの中のゆりの花のようだ。

女は、自分のことを「**シャロンのサフラン、谷のゆりの花。**」と言いました。確かに、美しさは持っているかもしれないけれども、それほど目立つような形での美しさではありません。どこにでいる、女の子ですというぐらいのノリでしょう。しかしソロモンは、それをバシッと否定しました。「**わが愛する者が娘たちの間にいるのは、いばらの中のゆりの花のようだ。**」茨の中のゆりだと言っています。他の娘たちを茨として、その中にあなたが百合となっているのだ、と際立たせています。

茨と言えば、私たちはアダムが罪を犯した後で、土地から生えてきたものであることを知っています。「創世記 3:18 土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。」ですから、茨という罪の結果もたらされた地上に私たちは生きています。何かを行っても、そこから出てくるものは茨だけ、自分を痛めつけることだけになっています。けれども、主イエスがその茨を受けてくださいました。十字架に付けられる時に、主は茨の冠をかむられました。その茨はアダムが罪を犯したために、もたらされたものであり、主は私たちの罪をそのような形で負ってくださったのです。そして、主はこの世から私たちを引き離してくださいました。ご自分のもの、聖なる者としてくださいました。そして、私たちを「**いばらの中のゆりの花**」と呼んでくださいます。

3A 自分を満たす方 3

1B 実を結ばない林

3 私の愛する方が若者たちの間におられるのは、林の木の中のりんごの木のように。私はその陰にすわりたいと切に望みました。その実は私の口に甘いのです。

女は、ソロモンの愛に応えて、このようにソロモンを表現しています。「**林の木の中のりんごの木のように。**」と言っています。数多くの若者がおり、彼らは林の木々であります。ソロモンだけはりんごの木であると言っています。木々には、自分が食べてその飢えや渇きをしのぐことができるような実は結ばれていません。そのような、自分の飢え渇きが満たされていないところに、ソロモンが満たしてくれる存在として立っていた、ということです。

私たちの魂は絶えず飢え渴いています。自分を受け入れ、自分を満たすことについて、絶えず飢え渴いています。ちょうどそれは、食物を取るのと同じように、定期的に、いや絶えずやってくる欲求です。そこに、私たちの主イエス・キリストは、ご自分を罪のための供え物となることによって、その永遠の愛をもって満たしてくださいませ。「1ヨハネ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

しかし、あのサマリヤの女のように、私たち人間は他の何かによって、その渴きを癒そうとしてしまいます。「イエスは答えて言われた。「ヨハネ 4:13-14 この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」サマリヤの女にとって、また渴いてしまう水とは、男との関係でした。男によって満たされようとしているのですが、必ずその期待が裏切られ、傷ついていきます。私たちが罪によって自分にもたらした傷を、ご自身が受けられた打ち傷によって、突き刺された釘によって受けてくださったイエスご自身が、全き満たしを私たちの魂に与えてくれます。

私たちが、何か自分でいろいろ求めているのだけれども、どうしても満たされていないということがないでしょうか？神を求めている、イエス様を求めていると言っても、実は神についてのこと、イエス様についてのことを求めてしまっていないでしょうか？そのうちに、サマリヤの女と同じように、「これはだめだ。」と思って、他のを試すのですが、また同じことを繰り返していることに気づくのです。それは、自分自身の心をそのまま神のところに持って行っていないから、起こっていることです。神に満たされる時に、私たちの心は満足するからです。

2B 陰になってくださる方

そして、女はソロモンの、りんごの木を「**その陰にすわりたいと切に望みました。**」と言っています。「**陰**」という表現が出てくる時は、私たちはあまり実感できませんが、これは「守られている」ことを意味します。中東の日差しは非常に強いです。陰があるというのは、そうした苛酷な太陽光線から自分を守ってくれることを意味します。つまり、女は自分が愛されて、ソロモンから守られていること、ここに留まっていることができました。

愛されているという安心は、私たちに保証を与えます。大きな保護になります。詩篇の著者が次のように言いました。「詩篇 91:1-2 いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。私は主に申し上げよう。「わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神。」と。」そして91篇の最後をこう書いています。「91:14-15 彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。」ですから、自分が神に愛されていて、この方の陰に自分が隠れていることを知っている人は、ここにあるように、

主を呼び求める時に、主は喜んでその人を守ってくださいます。

このように、神に愛されている自信がないと、どうしても他のものを陰にしようとします。自分の行ないがあるでしょう。自分の行ないによって、何かを行なっていることによって、自分を壁にして守っていかうとします。けれども、その魂は極めて不安定です。パリサイ人たちのように、自分のしていることを否定されると、たちまち攻撃的になります。私たちは昔ハムスターを多く飼いましたが、購入してから初めの一週間は、ものすごく警戒していて、あの小さいハムスターでも、噛まれやしないかと心配になるほどでした。陰を持っていない状態です。けれども、自分が飼い主から与えられる餌で生きることができることを知ることで、少しずつ慣れてきて、最後は手乗りするほどにまですなります。

しかし、自分の行ないを自分の壁にして守ろうとしていると、警戒しているハムスターのようになってしまいます。私たちは、だれもが愛を必要としています。この苛酷な世において、陰が必要なのです。そしてその愛は、神とキリストから降り注がれる愛です。そして、その陰を手に行っているからこそ、私たちは苛酷な日差しを受けても、避けることのできる場所が用意されているのです。

3B 味わう喜び

そして女は、「**その実は私の口に甘いのです。**」と言いました。実際に、その愛を自分のものとして食べるのです。「詩篇 34:8 主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。」とあります。女は、ソロモンからの愛をそのまま食べるように受けました。それは、結婚して夫婦の関係に入り、親密な交わりをするところまで食べました。同じように、自分自身が主のすばらしさを味わい、それを見つめることが大切です。私たちは、主との歩みがいかにすばらしいかを、聖書の知識が与えられると、口で説明できるかもしれません。人々との会話の中で、いかに主がすばらしいのか、人の話は聞くことができるかもしれません。けれども、自分自身で味わって初めて、本当に「知る」ようになるのです。

私たち人間はしばしば、これを「他人のことだから」として、客観的に見て自分のことだと思わないようにしています。他の人が神に満たされて、このように変わりましたという証しを聞くとします。「それは、その人が受けたものだ。」確かにその通りです。主はその人に対して、すばらしい恵みを施してくださいました。けれども、そのことを理由にして自分自身で、主のすばらしさを味わうことを拒んでしまっていることがあります。しかし、自分自身が味わいなさいと主は命じられるのです。他人事にするのではなく、自分が味わいます。

主から与えられるものは、度を越えた表現になっています。主のすばらしさは、ただすばらしいのではなく、最上級の言葉と表現になっています。「ヨハネ 10:10 わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」イエス様は私たちに命を与えるだけでなく、それを豊かに、あるいは豊富に持たせます。主にあつて喜ぶ時に、その喜びについて、ペテロはこう言いました。

「1ペテロ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、榮えに満ちた喜びにおどっています。」言葉に言い尽くすことのできない喜びです。あまりにも榮えに満ちているので、言葉に表現できないのです。それから、神の平安については、「ピリピ 4:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。」単なる平安ではなく、すべての考えにまさる神の平安です。これはもう、味わうしかないのです。自分の手に取って、そのすばらしさを味わうのです。

4A 宴の家にある愛の旗 4

1B 自分に与えられた席

4 あの方は私を酒宴の席に伴われました。私の上に翻るあの方の旗じるしは愛でした。

これは、どのような光景かと言いますと、彼女が公の宴に席に招かれています。あまりにも席が多く、そして全く知らない人ばかりがそこで座っています。その中で、なんと自分指定の席が旗印であるではないですか！彼女は、もしかしたら全く場違いだったかもしれません。宮廷にいる、肌が色白なきれいな娘たちがたくさんいる中で、野原で日焼けした肌を持つ自分が、「なんでここにいるの？」と思われそうなものを、その旗があることによって自分は、怯えることなく、その恵みにあずかって、そこに安心して座ることができます。その旗印が、ソロモンの彼女への愛なのだ、ということであります。ソロモンは彼女のことをとても愛しているので、私的な空間だけでなく、公の場にいる時も彼女のことを配慮して、旗印を置いてくれたのです。このように、ソロモンは主体的に、能動的に、彼女を守って、愛していました。

2B 真実を知る神の愛

主は、そのことを私のことを全てご存知の上で行ってくださいます。主が私を愛して、それで私が何をしてきたか、何を思っているのか、私の全てを知っていながら、なおのこと、自分の思いをはるかに超えたとこにあるご自分の愛を注いでくださいます。

私たちは、自分が受け入れられるのか恐れて生きています。男女が結婚前提で付きあっている時に、結婚に至るまで知らなかった重大な真実が出てきたりします。それは、結婚までは良く見せていこうと努力していたからです。良いレストランに連れて行ったり、相手に不満をもたせたくないで、いろいろな準備をします。そして、何か相手に不満があっても、それは自分のほうで我慢しています。けれども、結婚してからこんな感情を抱いていたのかとびっくりします。本当のこと、真実なことを示し始めるからです。なぜ隠していたのかと言いますと、自分の本当の姿を見せると、相手が結婚をやめてしまうかもしれないと恐れていたからです。

しかし、イエス様は私の真実な姿を知っておられるにも関わらず、それでも愛してくださいます。弱点があるにも関わらず、愛しておられ、受け入れておられます。自分の全て、足のつま先から、

頭のとっぺんまで愛で包んでくださっています。そしてシュネムの女にソロモンが語ったように、「これが、私の愛する方、イエス様です。この方の旗印は愛です。」と言うことができるのです。

3B 自分の中に作る律法

ですから、決して自分で何かをすることを主との関係で持ってこないでください。自分の中で、規則を作って、その中で動くことによって、自分を満足させようとししないでください。このように自分の中で規則や律法を作ること、神から受け入れられ、人から受け入れられると思わないでください。そうすると、必ず破綻します。そんな関係は、不安定すぎます。神とは、律法の行ないではなく、愛による関係です。

パウロがなぜ、あれだけのことができたのでしょうか。とてつもない広範囲の宣教活動を支えたのは何でしょうか。「2コリント5:14というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。」キリストの愛に駆り立てられて、それであれだけの大きな働きができました。私たちが動けない、あるいは、的外れな動きをしているならば、それは一重に、自分の頑張りではないことを知ることは大切です。そうではなく、自分がキリストにある神の愛に触れられていないからです。自分で何とかやっ払いこうという、自分から始まる行ないは、必ず否定されるので、あとで怒ってしまいます。そして失敗してしまうと、非常に落ち込み、もう自分は立ち直りができないとして、不安定なのです。

そうではないのです、自分が失敗してしまった後でも、欠点をまた他の人に見せてしまった後でも、主が自分にこれほどまでに良くして下さることを発見します。自分は、これは最悪だと後悔している時でも、まるで無視するかのように、ご自分の愛を注いでくださいます。特別な取り計らいをして下さるのです。ですから、神の愛に信頼しましょう。人の愛はあまりにも頼りになりません。ある時に何かやっ払いいても、あきると諦めるのです。しかし、私たちの信じておられる神の愛は変わることがありません。しかし、神は永遠の愛をもって私たちを愛してくださいました。